

Hochi Life

芸術で



障害者スポーツ普及啓発のために都が作成した「Be The HERO」の一場面(東京都提供)

キャブ翼 高橋陽一さんら出演5000万円PV

東京大会に向けて、障害者についての理解を深めようという動きは行政でも始まっている。3月には、障害者の芸術文化の祭典の全国的連携を目指す「2020年東京五輪・パラリンピックに向けた障がい者の芸術文化活動推進知事連盟」が設立され、東京都などの13都県が加盟した。

狙いはパラリンピックの成功に向けて「ユニバーサル社会」(健常者と障害者の共生)を目指しているというものだ。設立会見には遠藤利明五輪担当相(66)が来場。脳性マヒでありながら音楽活動をする井谷優太さん(31)による特殊なシンセサイザーの生演奏が流れる中で、遠藤大臣は障害者の作品が含まれる「アール・プリュット展」の展示品を鑑賞。独創的な絵画や造形に見入りながら「へー」を連発していた。

今後は障害者による舞台芸術

祭や美術作品展を全国で持ち回り開催し、芸術文化振興にかかわる提案・要請活動を行う方針。発起人となった鳥取県の平井伸治知事(54)は「(20年に向けての文化振興を)一つの県でやるには限界がある。障害者の芸術家の中には世界に発信する力を持っている人もいる。10月にキックオフイベントをやりたい」と話した。

また、東京都は3月に障害者スポーツ普及啓発映像「Be The HERO」を約5000万円かけて制作。車いすテニスの国枝慎吾らパラリンピック選手や企画に賛同した漫画「キャプテン翼」の作者・高橋陽一さんらが出演した障害者スポーツの魅力伝えるプロモーションビデオだ。都の担当者によると都内の各市町村や特別支援学校にDVDを配布し、イベントなどで放映を呼び掛けていく方針だ。



高橋陽一さんらが描いたアスリートたち

2020年五輪へ 新東京物語

2020年東京パラリンピックに向けて障害者スポーツへの関心を高めようという機運が民間と行政で高まってきている。障害のある人となない人が共生する社会を目指す「障害者差別解消法」が4月1日に施行され、NPO法人が主宰する障害者ボランティアの体験講座を取り入れる企業も出てきた。パラリンピックへの関心を高めようと各方面での動きが活発化している。(甲斐 毅彦)

怖い 驚きの声

東京五輪・パラリンピックのゴールドパートナーの一つ、住宅設備機器業界最大手、LIXIL(リクシル)では3月26日に東京・霞が関の本社で、社員を対象とした障害者ボランティアの体験講座が行われた。参加者の男女32人のほとんどが車いすに座るのも初めてだ。講師役は2010年バンクーバーパラリンピック、アイススレッジホッケー銀メダリストの上原大祐さん(34)。街中にある段差を乗り越える実技を体験した。

乗る側は「乗り越えてのけぞるだけでこんなに怖いと思わなかった」。押す側は「思った以上にタイミングが難しい」。簡単にしか見えなかった車いすサポートだけでも、体験後は驚きの声が上がった。同社インテリア事業部の酒本久美子さん(37)は20年にパラリンピック会場のボランティアに携わりたい思いで参加。「車いすに乗っただけでも障害者の方と心隔たりがあることが実感できました。ユニバーサ

車いす体験で 大ピンチ。大作戦

ルデザイン(障害・能力を問わずに誰でも利用できる施設の設計)に興味があるので、暮らしと障害者スポーツをつなぐ商品開発にも、体験を役立てていきたい」と話した。

この講座を企画したのは障害者スポーツの普及を目指す、05年に設立されたNPO法人「STAND」(東京・渋谷区)の代表理事・伊藤数子さん(53)。スポーツ庁スポーツ審議会委員

と東京五輪・パラリンピック競技大会組織委顧問も務める伊藤さんは「障害者との接し方が分かるようになれば、パラスポーツ(障害者スポーツ)への興味に必ずつながる」と力説する。

隔たりのない社会

障害者スポーツの迫力や魅力を伝えようと伊藤さんは05年から電動いすサッカー、車いすテニスなどの競技のネット生中継を開始。続いて選手たちの動画配信も始めた。当初のアクセス数は月にせいぜい1000PV(ページビュー)程度。「障害者」という限られたコミュニティの枠をなかなか出なかった。爆発的に伸びる契機となったのは13年9月の東京大会決定。現在は月に約30万PVあるという。「知る」「見る」が徐々に成熟してきたところで、伊藤さんは「参加する」「応援する」とコマを進め、障害者スポーツの体験会、ボランティア講座の実施を決めた。

ボランティア講座は昨年3月、初めて一般市民向けに50人募集したところ、160人の応募があった。企業ではLIXILよりも前に清水建設(東京都中央区)が昨年11月と今年2月に2度社員向けに開催。同社では各自治体と協力して、ボランティアの育成に

知って、見えて、参加して、応援する

テレビで NHK 質も量も 歴史に残る放送を

PRに欠かせないのは、不特定多数の人が競技を見ることが出来るテレビ中継だ。パラリンピックの放送ライセンスを持つNHKの広報局によると、初開催となった1964年には開会式を生中継し、車いすバスケット

ールなどを放送している。本格的な放送を始めたのは98年冬季の長野大会からで、2014年のソチ大会までの放送時間量は合計約30時間前後、夏季大会は00年のシドニー大会以降、40時間前後で推移している。同広報局は「リオ大会は、競技の中継を多く取り入れて、スポーツとしての魅力をしっかりお伝えしたい」とし、東京大会はリオ大会終了後に計画を決め

て「質・量とも歴史に残るパラリンピック放送」となるよう、しっかり準備して取り組んでいく」としている。また08年北京大会の車いすバスケットボールからパラリンピックの放送を始めた「スカパーノ」はリオ大会で「24時間専門チャンネル」を開局することを決めた。日本選手の出場競技を中心に生中継し、連日2時間枠のハイライト番組を放送予定。

も着手していく方針だという。東京大会では約8万人のボランティアが必要になると見込まれるが、都などの行政は障害者ボランティアの育成にはまだ本格的には取り組んでいない。伊藤さんは「できることから始められるのが民間のいいところ。ノウハウは行政に提供していきたい。20年に向けて、健常者と障害者の隔たりがなくスポーツを楽しめる社会づくりに貢献していきたい」と意気込んでいる。